西光寺だより

第七十八号　平成二九年　二月一日発行

●今月のことば●

今回は七高僧最後の高僧、源空上人でございます。別名は皆さんもご存じのとおり法然聖人であります。

平安時代の末期、世がようやく騒然とし、源平の争いがはじまる前夜、美作国（岡山県）にお生まれになられました。九歳の時、父が暗殺されたのがきっかけで出家され、比叡山にのぼり天台学を学び、やがて恵心僧都の『往生要集』に心ゆさぶられ、ことに善導大師の『観経疏』を読むにいたって、「一心に弥陀の名号を専念して」（『真宗聖典』二一七頁）というお言葉に出遇われました。それは、四十三歳のことであったと伝えられています。それが衝撃であったのは、「念仏でもよい」という自力聖道門の伝統的な教えとは異なり、「ただ念仏しかない」という教えだったからです。そして、阿弥陀如来の本願を仰ぐ念仏の行者になられました。

京都東山の吉水に草庵をかまえ、老若男女貴賤道俗を問わず、平易に念仏の教えをおひろめになり、親鸞聖人もまた、この吉水教団に集まってきた人々の一人でした。しかし、その盛況ぶりをねたまれ、吉水教団はたびたび迫害にあい、ついに念仏停止の勅令によって解散させられましたが、その教えは多くの弟子たちに後々まで受け継がれていきました。

源空上人の主著は『選択本願念仏集』ですが、源空上人はこれによって、念仏を専修する「浄土宗」という独立した一宗をたてられました。この上人の衣鉢を正しく受け継ぎ、更に発展し、他力念仏の道を押し進められたのが親鸞聖人でありました。

親鸞聖人の直接の師である法然聖人。師の教えについて親鸞聖人はどのような解釈をされたのでしょうか。

今回で七高僧が終わり、次回最後の四句でこの正信偈の結びにはいります。

本師源空明仏教・・源空上人は仏教をきわめつくして
憐愍善悪凡夫人・・すべての人（善悪の凡夫）をあわれみて
真宗教証興片州・・真実の宗教たる**真宗**を、日本の国におこし
選択本願弘悪世・・**選択本願**（第十八願）を、**悪世のこの世**にひろめられた
還来生死輪転家・・**生死輪転**の迷いの世界からぬけられず、とどまっているのは
決以疑情為所止・・本願の教えを疑い、信受しないからであり
速入寂静無為楽・・すみやかにさとりの世界に入るには
必以信心為能入・・ただ信心ひとつによると述べられた

（レッツ正信偈・真宗の教え参考）

【解　説】

●**片州**・・片隅にある国ということで日本のことを意味します。仏教が興ったインド、その仏教が大きく発展した中国、これらの国々からすれば、日本は、片隅の国なのです。

●**真宗**・・「真」は、真実ということ、「宗」は、もっとも中心になること、肝心かなめのことをいい、したがって、「真宗」は、仏教、つまり釈尊の教えの全体の中で、たった一つの真実であり、肝心かなめである、ということを意味しています。宗派名ではありません。

●**選択本願**・・あらゆる人々を一人のこらず救わずにはおかないという阿弥陀仏の願い

●**悪世のこの世**・・私たちの生きている世界

●**還来**・・行ったり戻ったり、迷いの繰り返し

●**生死輪転**・・生まれては死に、死んでは生まれて、迷いの世界をさまよっている。

●**還来生死輪転家**

決以疑情為所止・・これからの四句は「信疑決判」といわれる偈文であります。それは、私たちが本願を疑っていつまでも迷いの世界にとどまるか（こ

の二句）、それとも本願を信じて浄土に往生し、さとりの世界に入るか（次の句）を表わされたものであります。

法然聖人は、『選択本願念仏集』に、**「まさに知るべし。生死の家には疑いをもって所止と為し、涅槃の城には信をもって能入と為す」**と述べられ、これからの四句の偈文はこの文に依った解釈であります。

親鸞聖人は、迷いの世界に輪廻し続けるのは「疑情」、つまり「疑う心」に止まっているからだと教えておられます。つまり、人が苦悩を背負うのは、人が「生死」から離れることができず、悩みに悩みを重ねなければならないのは、仏の教えを疑うからだと教えておられます。釈尊は、私たちのために『仏説無量寿経』をお説きになり、阿弥陀仏が、苦悩する人びとをすべて本当の安楽に導きたいと願っておられるのだから、その阿弥陀仏の本願にお任せしなさいと、教えておられます。ところが、私たちは、その教えを疑うのです。それでは、どうして、疑う心が生ずるのでしょうか。それは、教えに触れるに先立って、自分が心にいだいている思いを重視しているからです。仏の教えよりも、自分の考えを尊重しているからです。自分が思っていることと事実とは、まったく関係はないはずなのですが、自分はそれなりにわかっていると思っていますから、自分を信用するのです。

自分の考えを無条件に信用して、それを確保したままで教えに接しますと、教えを素直に受け取れなくなったり、また、自分の考えと、教えとの間に食い違いが起こったりします。食い違いが起こった時には、自分の方を信用しますから、教えは信用できなくなり、「疑い」になります。今に至るまでの長い間このような世界に迷い続けてきたことを知るがよいと説かれました。

●**寂静無為楽**・・寂静・無為はともに涅槃の異名であり、さとりの世界の意味であります。

●**能入**・・入ることのできる因。信心が浄土に入る因となるものであること。

●**速入寂静無為楽**

必以信心為能入・・この二句は前文の後半部分**「涅槃の城には信をもって能入と為す」**に依るもので、「本願を信じて浄土に往生し、さとりの世界に入る」を表わしたものであります。

この文について親鸞聖人は**「涅槃の城には**、というのは、安養浄土のことをいうのであり、これは涅槃の都ということである。**信をもって能入と為す**、というのは、真実信心を得た人は阿弥陀仏の本願に誓われた真実の浄土に往生することができると知るがよいという言葉である。信心はさとりを開く因であり、この上ない涅槃に至る因であると知るがよい」と述べられていることからも分かります。

前の二句では「疑い（疑情）をもって所止と為し」とありましたが、今の句では「信（信心）をもって能入と為す」となっています。この二句が対照となっているのです。「疑情」の反対が「信心」です。真実よりも、自我を優先させることによって、真実を疑う情（こころ）が生じますが、その疑いの情がないことが、信（まこと）の心なのです。

このように「疑いの心によって、迷いの苦の繰り返しの中に止めさせられ、」「信心によって、本当の安楽に入ることができる」という関係が述べてあるわけです。

合掌

◆二・三月の行事◆

・三　月　二十五　日（土）

仏教婦人会総会・追弔会

午前十一時三〇分～追弔会・昼食

午後一時～　総会

西光寺本堂

浄土真宗本願寺派　白毫山　西光寺

大阪府茨木市西河原一―七―二

電話　〇七二―六二二―四七九四

FAX　〇七二―六二二―九二九一

http://www.osaka-saikouji.net/